

「となりのトトロ」を臨床心理学的に眺める試み(1) —防衛機制を中心に—

今里 有紀子^{*1} 疋田 基道^{*2}

An Examination of “*My neighbor Totoro*” from the
Viewpoint of Clinical Psychology (1):
Focusing on Defense Mechanisms

Yukiko IMARI and Motomichi HIKIDA

People use various defense mechanisms to defend themselves from intolerable psychic pain. We can observe these defense mechanisms in daily life. The authors discussed these defense mechanisms in connection with the popular animated movie “My neighbor Totoro”. The authors hypothesized that we may observe some defense mechanisms in the behavior of the characters in this movie. The authors also hypothesized that we may observe unconscious affects in parapraxes and in the dreams of characters. Before authors began the analysis, they proposed to view “Satsuki” and “Mei” as one person, because Hayao Miyazaki who is the director of this movie said that originally “Satsuki” and “Mei” were one person. The authors discussed four defense mechanisms (splitting, false self, manic defense, and projection) based on a detailed analysis of the psychological description of characters in this movie. They discussed that these defense mechanisms are used to deny two unconscious affects (anxiety of object loss and oedipal impulse). An oedipal impulse was seen in parapraxes and in dreams. The authors discussed that many statements spoken by Hayao Miyazaki also support these hypotheses.

Key words : “My neighbor Totoro” , defense mechanisms, unconscious

I. はじめに

感覚的なものから喜怒哀楽といった感情、さらには認知、思考といったことの中での様々な体験を言葉にしていき、自身の内的な体験に新たな気づきを得ていくこ

とは多くの心理療法の理論において本質的要素となっている。例えば、精神分析においては創始者である Freud (1933) の「エスであったものを自我にしなければならぬ」という言葉が示す通り、自らの無意識を意識化していくことが求められる。そ

キーワード：「となりのトトロ」、防衛機制、無意識

※1 本学人間生活学部児童臨床研究所

※2 本学人間生活学部児童臨床研究所 清心こころの相談室

の他、Rogersのクライエント中心療法においては「対人関係的な知る過程」(1963)が重視されている。さらにそれを発展させたGendlinのフォーカシングはこころの実感からの気づきを促すことを第一義としている。認知行動療法においても、無自覚のうちに繰り返している自らの認知のあり方や自動思考に気づいていくことが求められる。

このように自分自身を直視し、自分という人間についての理解を深めていくことが心理療法プロセスの中には必ず含まれるのであるが、それが容易なものではないこともまた事実である。特に精神分析においては、直視したくない部分を見ないようにするための様々な防衛機制(Freud, A., 1936など)が明らかにされてきた。

この防衛機制については、精神分析や心理療法等に携わらない者にとっては馴染みが薄いことも多く、言葉は知っていたとしても「臨床心理学の専門用語であって心理療法という特殊な状況においてのみ見出される概念」と思われていることも多い。しかし、この防衛機制は、誰しもが生きていく上で無自覚のうちに行っているものであり、日常生活を細かく見渡してみれば、何気ないところにも垣間見ることができる身近なものである。

そこで、ポピュラーでなじみ深い日本アニメ映画の「となりのトトロ」(宮崎駿監督, 1988)を素材にしてこのことの検討を試みたいと思う。

II. 研究の目的と仮説

1. 「となりのトトロ」を素材とする理由

まず第1に「となりのトトロ」は年齢性別を問わず多くの人々に愛されている作品であることが挙げられる。多くの人にとってなじみのある作品だからこそ、あらすじや各場面について詳細に触れなくても、登場人物のこころの動きを理解していくこと

が可能であり、防衛機制についても親しみをもって理解していくことが可能となる。このように親近感をもって防衛機制に触れていくことが、ひいては自分自身を理解するときに有用な視点として生きてくるように思われる。

第2の理由は「となりのトトロ」はテレビで繰り返し放映されているにも関わらず、その度に高い視聴率を出している(久美, 2008)が、このように多くの人々を惹きつけてやまないのは何故か、ということについて考えてみたいからである。

そして第3の理由であるが、このことが最も強調したい理由である。それは、監督の宮崎駿の人間観や作品に込める思いにつながるものである。これまで宮崎が残してきた言葉からうかがえる宮崎の人間観とは、「人間は高貴で慈しみ深い面と破壊的でカタストロフィックな側面の両面、あるいは愛と憎しみの両面、そういう両面を揺れ動いている矛盾を抱えた存在である」というものである。

例えば、1990年のインタビューでは「生き物っていうのは動態だからね。動いている。静的な存在じゃないから。だから、同じ人物でもね、ものすごく愚劣な瞬間があったり、それからなんかやたらに高揚してね、あるいは実に思いやりに満ちたり、そういうふう揺れ動いているものなんですよ」(宮崎, 2002に所収)と述べている。また、1997年の「もののけ姫」のインタビューでは「タタラ場にいる人間たちはいい人ばかりでなくて、愚かな部分もあるし、凶暴な部分もあるっていうふうにしなないと、それは人間を描いたことにならないですから」(宮崎, 2002に所収)とも述べている。

このような人間観をもった宮崎であるが、不思議なことに「となりのトトロ」の中ではこの人間の愚かな面や凶暴な面とい

うのが全くと言っていいほど描かれていない。細江（2006）はそのことについて、「この映画では攻撃性が極端に抑制されており、現実世界にはびこる攻撃性と権力支配関係、争い・不和等が殆ど排除され、生物界の弱肉強食はさりげなく隠蔽されている」と述べている。加えて、「親戚や友人がいると思われる東京の喧騒は完全に消しさらされ、人間関係の感情のもつれなどもほぼ完全に棄て去られ、そしてこのように描くことで、死の不安を否認している」とも論じている。

では宮崎自身はどう述べているのであろうか。宮崎は「本当の悪役が出てこない、人間の中にある悪とか愚かな部分というものに目を背けて、肯定的な部分とか善いものだけを出しているんじゃないか」という批評に対して「『となりのトトロ』なんか全くそうです。はっきり意図的にやりました。こういう人達がいてくれたらいいなあ、こういう隣の人がいたらいいなあ、っていうふうに」と述べている（細江、2006）。このように見てくると「となりのトトロ」は宮崎の願望や理想を表現していると同時に、その反対側にあるものを強く抑圧した作品であることが推測される。つまり、「となりのトトロ」自体がある種の反動形成であり、否認や抑圧が強く作用している作品と言える。だとすると、その作品の中にはそれを可能にするための、様々な防衛機制が明示的、暗示的に描かれていると考えられ、「となりのトトロ」は防衛機制を探索するには格好の作品と言うことができる。

2. 目的と仮説について

以上のような理由から、本研究では「となりのトトロ」を素材として、日常生活に垣間見られる防衛機制を抽出していくことを目的としたい。以下に仮説を述べる。

(1) 「となりのトトロ」は人間の否定的な

側面や不安等のネガティブな感情を強く抑圧した作品であり、その抑圧のプロセスは防衛機制として登場人物の振る舞いの中に読み取ることができると思われる。

- (2) Freud (1900, 1901) は認めたくない感情を抑圧しようとしても、それらの感情は言い間違い等の失策行為や夢の中に現れてくることを指摘しているが、「となりのトトロ」の登場人物の失策行為や夢の中にもそれが表れていると考えられる。

この二つの仮説を以下において精神力動的視点から検討していきたいと思う。

3. 「となりのトトロ」のあらすじ

5月のある日、小学4年生のサツキと4歳のメイは父親とともに、山間に田んぼが広がる自然豊かな土地に引っ越してくる。その引越しは、入院中の母親が退院した時に空気の良い場所に住めるようにするためのものであった。引っ越してきた初日からサツキとメイはススワタリという不思議な生き物に出会い、その後もトトロやネコバスといった変な生き物たちに出会っていく。ある日、母親の入院している病院から電報が届き、母親の帰宅が延期になってしまう。落胆と「母親が死んでしまうのではないか」という不安に襲われたサツキとメイは、がっくりと力を落とし、その後メイは迷子になってしまう。メイが迷子になったことを知ったサツキは、懸命にメイを探そうとし、そしてトトロに助けを求める。トトロの計らいでメイは見つかり、サツキとメイはネコバスに乗って母親の病院へと向かう。母親の病室が見える木の上から、元気そうに父親と会話する母親の姿を見て二人は安心し、そして家路につく。

Ⅲ. 分析と考察

1. サツキとメイについて

「となりのトトロ」の分析に先立ち、ある操作手続きをしたい。その手続きとは、サツキとメイを一人の人物として見るということである。

その根拠について以下に見ていきたい。まずはサツキとメイの誕生エピソードにそれはある。それは「アニメ制作が着手されるかなり間際に、ひとりだった女の子が、4歳のメイと小学4年生のサツキに分離したということである。その点に関して、宮崎は次のように語っている『年齢のちがうふたりの女の子が、まだひとりのままで、この企画の段階では未分化だったんです。それで今度の映画化の話が決まる1年前ぐらいかな、粗雑な話だけど、あっ、ふたりにすりゃいいんだと（笑）、これで話はできたと思った』」（青木、2011a）というものである。つまり、宮崎は作品の演出上、一人の女の子を二人に分けたのである。しからは、作品を分析していくためには、一人の女の子に戻してから吟味しなければその本質的な部分を見落としてしまうことになるだろう。

このような作品の演出についてはFreudにも記述がある。Freud（1916）は成功した時に破滅する人間という性格類型を論じる際に、シェイクスピアのマクベスをその題材として取り上げているが、その中でルードヴィッヒ・イェーケルスのシェイクスピア論を取り上げている。イェーケルスの考えとは「シェイクスピアは往々にして一性格を2人の人物のうちに振り分けるから、それらを再び一つに合わせてみないと、2人物のいずれも不完全で、理解しがたいものに思われる」というものである。

その他にも、サツキとメイを一人の人物と見ることの根拠はある。それは二人の

名前に由来することである。サツキ（皁月）は陰暦の5月を表す言葉であり、メイ（May）の意味も5月であり、どちらも5月を意味するという共通点がある。このことも二人は同一人物であることを指し示していると考えられる。

さらには、二人は物語の途中で、トトロと共にどんぐりを芽吹かせて巨木に育て、そしてトトロとともに夜空を駆け巡るといふ夢を見るが、このように二人が同じ夢を見るということも二人が同一人物であることの根拠となる。

以上、サツキとメイを一人の人物として見ることの根拠を述べてきたが、そのようにして二人を一人として見ると、自我の分裂というFreud（1940）が発見し、Klein（1946）が発展させた防衛機制を見ることが可能になる。以下に、このことについて考察していきたい。

2. 防衛機制

(1) 分裂と偽りの自己

Klein（1946）は、死の本能の活動から生じる不安や悪いと感じられるものを自我から取り除くために、人は自我を分裂させ、悪い自我を外界に投影することを論じた。このことをサツキとメイに当てはめるならば、両者は分裂させられた自我の部分ということになる。また宮崎はサツキが主人公と考えていたようである（細江、2006）。それに従ってサツキのほうを主人格として考えると、メイはサツキが分裂排除した悪く感じられる自分自身の一部ということになるだろう。以下、サツキとメイについてそれぞれみていきたい。

<メイ>

青木（2011a）によるメイの見立ては、口唇期的（誕生からおよそ1歳までの時期の特徴であり、メイの年齢よりもまだ幼い時期にあたる）な精神状態が強く残存して

いて、母親との関係が未分化で母子一体の段階に固着しているということである。著者らもこの見立てを支持し、さらに、それをサツキのこころの中にある、母親と一体感を求める乳児的な部分として考えたい。母親の入院という、母親の不在によってサツキの不安は高まり、その不安からサツキのこころは退行し、幼児的な部分が前面に出てきたと考えられる。このこころの段階では、まだ無意識から自我がはっきりと分化しておらず、主に快感原則に従って生きている。それゆえ、メイは無邪気で天真爛漫であるが、自分の欲求を押し通そうとし、それが叶えられないと怒りを爆発させる。そして、青木（2011a）や伊崎（2006）も指摘しているように、現実と空想との区別が明確ではなく、現実検討能力は低い。そのため、無意識的な空想を現実として捉えがちになり、それがトトロとの出会いを可能にする。

<サツキ>

いわば現実原則で生きている自我の部分である。母親との一体感を求める口唇期的な欲求や無意識的な欲求を抑圧し、「良い子」として懸命に母親の代わりをやっている。分裂機制とは異なるが、Winnicott（1960）の概念を用いるならば、「偽りの自己」で生きていると言えるかもしれない。しかし、サツキとメイはともに行動することで両者は一心同体なのである。母親の代理として懸命に家事をこなしながらも、それに埋没することなく、常にそこにメイも随伴しているがゆえに、決して「良い子」一辺倒ではない。母親の不在によって、サツキのこころは退行したが、しかし固着点に退行して不適応を起こすこともなく、また幼児的な部分を過度に抑圧して「良い子」になるのではなく、ほどよく退行し、ほどよく現実原則で生き、バランス良く両者（サツキとメイ）を保つこ

とができているのが物語の前半であろう。Winnicott（1960）は、偽りの自己による防衛には健康的なものから重症のものまであることを指摘している。その上で「自己の服従的な側面（偽りの自己）をもちながらも同時に創造的で自発的存在であることが健康的で正常なあり方である」とも述べている。つまりメイを保ちながら同時に良い子であるサツキの振る舞いは、健康的であると言えよう。物語の後半でメイが迷子になり、サツキだけになった状況というのは、このバランスが崩壊しており、病的な偽りの自己が生じかねない危機的状況とも言える。しかしその局面でサツキは懸命にメイを探し出すことによって救われたのである。

(2) 躁的防衛

メイは分裂排除されたサツキの自己の一部であると述べてきたが、ではなぜサツキはメイを分裂排除する必要があるのだろうか。まず考えられることは、母親との一体感を希求することで否応なしに強まる、母親の不在というこころの痛み、母親が死んでしまうのではないかという不安、さらには母子一体が叶えられない欲求不満などの苦痛な感覚を、自身のこころの中に留めておくことができないが故に、ということが挙げられる。

このような抑うつ不安や喪失を体験することに対する一つの防衛として躁的防衛がある。躁的防衛とは心的現実に対する万能感に根ざした否認に基礎を置き、その対象関係は征服感、支配感、そして軽蔑によって特徴づけられる防衛機制である（Klein, 1935）。

サツキとメイの振る舞いや両者のやり取りを見てみると、母親の退院を「明日？明日？」と心待ちにするのはメイであり、母子一体を満喫すべく母親と同じ布団で一緒に寝たいという思いを口にするのも、やは

りメイである。サツキはそういうメイの言動を、少々軽蔑的に皮肉り、「自分はそういう気持ちはすでに克服しているんだ」と勝ち誇っているかのように振る舞う。

また、引越し初日の夜にサツキとメイと父親が入浴中、風で家がきしみ3人は不安や怖さを抱くが、父親の高笑いにすぐにつられるのはサツキのほうであり、威勢よく笑うことで不安や怖さを万能的に吹き飛ばそうとしているようにみえる。

さらに躁の防衛を用いていたことの根拠となる場面がある。それは、母親の帰宅が風邪によって延期になる報告を受けた後のサツキの姿である。それまでは母親の不在をもろともせず、明るくテキパキと家事をこなし、元気に学校に通っていたサツキが、ここにきて急に身体の力が抜け、横たわってしまうのである。物語の中ではそれは「母親が死んでしまうのではないか」という不安から生じたものとして描かれている。しかし、ここでサツキにもたらされた情報は「風邪のために母親の帰宅が延期される」ということだけであり、そのことだけからすぐに母親の死を連想して不安が高まったというのは少々無理がある。ここでのサツキの脱力は、その後の「この前もそうだったの…、ほんの一寸入院するだけだって…、風邪みたいなものだって…」というセリフからもうかがえるように、それ以前から母親の死について何かしらの思いを抱いており、それが帰宅の延期によって現実のものになったという不安からの反応と考えるのが自然であると思われる。つまりそれまでは、母親の死に関する観念を万能的に否認して無理やり気丈に振舞ってきたが、母親の帰宅延期という事態を前にその防衛が破綻し、一気に不安に圧倒されたと考えられる。

(3) エディプス・コンプレックスの否認

サツキが自身のこころの一部をメイとし

て分裂排除するもう一つの理由はエディプス・コンプレックスを否認するためである。

サツキとメイを一人の人物としてみた時、「となりのトトロ」の物語は両親と娘の3人が織りなす家族の物語として浮かび上がってくるが、両親と子どもという3者関係は、まさしくエディプス的な布置なのである。周知の通りエディプス・コンプレックスとは、エディプス王が父親を殺して母親と結婚したというギリシア神話から Freud (1910) が命名したものであり、「異性の親に対する愛着と同性の親に対する敵対心から成る無意識の欲望の編成」(立木, 2012) である。そのような視点で、「となりのトトロ」を見ると、エディプス・コンプレックスを裏付けるような対象関係の布置を見出すことは容易である。以下にこのことについて述べてみたいと思う。

エディプス期(およそ3歳から5歳≒メイの年頃)以降、サツキには異性の親、つまり父親への愛着と母親への敵対的な感情が芽生えていったが、母親が病弱であったため母親に対して敵対心をあからさまに向けることへの罪悪感や抵抗が大きく、自我の発達にともなって、その感情はより幼い時の欲求(母子一体感を求める感情)と共に分裂排除されることになった。しかし、母親を亡きものにして父親を独占したい思いは無意識の中で常に活動し続けていた。そして身体的な発達に伴う欲動の高まりとともに未解決な葛藤が再燃する思春期に入ろうとする頃、母親が入院したことによって父親と二人きりの生活が始まり、エディプス的な願望が図らずも叶ってしまった。エディプス的な願望は叶えられたが、母子一体を求める気持ちは挫かれ、母親を失ったという絶望や不安に圧倒されると共に、自分が母親を排除したのではないかとという極度の罪悪感、母親から復讐されるのではないかとという迫害的不安が高じた。これら

の罪悪感や不安から自我を守るために、サツキはメイをさらに分裂排除する必要があったと考えられる。

(4) 投影

サツキはエディプス的な衝動を分裂排除し、それを外の世界に投影していると考えられるが、このことがうかがえるシーンがある。母親の帰宅が母親の風邪によって延期されることを知ったメイが「嫌だーっ」と不満を爆発させるシーンである。冷静になだめようとしても一向に言うことを聞こうとしないメイに対して、サツキは「じゃあ、お母さんが死んじゃっても良いのね」とメイに吐き捨てる。この言葉は、サツキ自身の落胆が加味したことによって、メイをたしなめる言葉が少々感情的になってしまったものであろうが、それだけでなく「お母さんが死んでも良い」と思っているのはメイの方である、とその気持ちの所在をメイに投影しているとも考えられる。

(5) 防衛機制のまとめ

サツキには喪失に対する不安とエディプス的な衝動があったが、サツキはそれらの感情から自我を防衛する必要にかられた。その際用いられた防衛機制としては「分裂」「偽りの自己」「躁的防衛」「投影」の4つがあったと考えられる。

3. 失策行為と夢

(1) 言い間違い

サツキには母親を求める気持ちや母親の回復を祈る気持ちの一方で、お母さんはいなくても良いという思いや、父親との関係を邪魔する者は亡きものにしたいという気持ちの両者があったと考えられるが、サツキはこの後者の気持ちを認め難く、それを強く抑圧しようとしたと考えられる。

そういう相反する二つの気持ちの片方を押し殺そうとしても、何気ない普段の生活の中にその抑えつけようとしたものが、言

い間違い等の形となってあらわれることを指摘したのは Freud (1901) であった。そしてメイは2か所で言い間違いをしているのである。それは決して子どもらしく可愛らしい言い間違いではないのである。メイが言い間違ってしまうのは、メイがサツキの投影の受け取り手であるからであろうし、自我の検閲がそれほど厳しくないからであろう。それは「オタマジャクシ」を「オジャマタクシ」と言い間違え、「トウモロコシ」を「トウモコロシ」と言い間違えているのである。まさに「邪魔者は殺したい」という思いがここに抑えきれずに顔を出しているのである。そして後者の言い間違いであるが、トウモロコシは母親に元気になってもらうための特効薬なのにも関わらず、そこに「殺し」という何とも物騒な言葉を忍び込ませているところに、両方の気持ちがあることのアンビバレンスが実に見事に表現されているのである。Freud は「言い間違えて反対のことを言う時は、ほとんど全ての例で、妨害する意向が妨害される意向とは反対のことを言い現わしており、従ってこの錯誤行為は合致しがたい二つの意向間の葛藤の表現なのです」(Freud, 1916-1917) と述べている。

人間はそういう葛藤を抱えながら生きているのである。きれい事だけで済ますのではなく、自分自身の否定的な面も否認せず受け入れ、そしてその両者のアンビバレンスを揺れながら生きているのが人間なのである。先にもふれたように監督の宮崎駿はそういう洞察を持っている人である。1990年のインタビューで「風の谷のナウシカ」や「宮沢賢治」が話題に上った時、宮崎は次のように語っている。「矛盾の真っ只中にいるから生きているのであって。(中略) 予定調和も天国も何もないですよ、そんなものは(笑)。(中略) 僕は、だから傷をもたないヒロインは作りたくないですよ、ね、

全然。(中略)人を殺した人間だから、殺すことの痛みが分かった人間だから。それで膝を曲げるんじゃないくて、それを背負って歩いている人間だからこの娘(ナウシカ)は描くに値するんじゃないかと僕は思ったんですよ。純潔であるとか、汚れてないことによって、それが価値があるっていうふうな見方というのはね、なんかものすごくくだらないんじゃないかっていう気がするんですね。その泥まみれで汚れてて、それで傷だらけだから。だから、宮沢賢治を僕は好きなんですよ」(宮崎, 2002 に所収)。このように語る宮崎であるが故に、「となりのトトロ」のサツキにおいても、母親に対して決して純潔とは言えない複雑な思いを抱いていたことを描こうとしたと考えられる。

(2) 夢

Freud (1900) の「夢は願望充足である」という有名な言葉がある。そこで「となりのトトロ」にもサツキとメイの夢が出てくるので、このことにも触れてみたいと思う。

その夢とは、先にも簡単に触れたが、サツキとメイが傘や葉をもったトトロとともに、しゃがんでのはび上がるという上下の動作を繰り返して(ドンドコ踊り)、どんぐりを芽吹かせ、そして巨木にまで成長させ、その後トトロに抱きついて夜空を駆け巡るというものである。

Freud (1900) は様々な類型夢を論じる中で、長く伸びるすべての物、杖、木の枝、傘等は男性性器の象徴となりやすいことを指摘しているが、トトロの持つ傘や巨木になる木の芽はそれを表していると言えるかもしれない。また Freud (1900) は、夢の中で階段や梯子を昇降するリズムカルな動作は性交のリズムに通ずること、そして空を飛ぶ夢は、性的感覚にも通じることを述べているが、これらのことを考慮すると、思春期にあるサツキの夢は性的な願望を充

足させようとする夢として見ることができるかもしれない。どんぐりが芽吹くということは、性的な交わりが新たなものを生み出すことや、生命の力、創造力を表しているとも言えるかもしれない。

しかし一方で、著者らは、宮崎 (1988) の次のような発言に注目したい。それは「となりのトトロ」のインタビューの中で、ドンドコ踊りによって木が伸びることにインタビュアーが触れた時の「あれは、まあ、木の原爆……(笑い)」(宮崎, 1996 に所収)という宮崎の言葉である。その後インタビュアーが、そのことについてさらに聞こうとするが、宮崎は笑うだけであった。インタビュアーは「笑って何も答えてくれない宮崎さん。観客が見たまま感じたまま受けとってほしいということのようだ」とその時の感想を記している。この「原爆」という言葉は何を意味しているのだろうか。巨大な木のシルエットがきのこ雲を連想させることから、つい冗談めかして口に出たが、デリケートな言葉だけにあらぬ誤解を与えぬようにとそれ以上は口をつぐんでしまったとも考えられる。しかしその後の宮崎の沈黙と言い、何か意味深なものをも感じさせる。

そのように考えるのも、宮崎は時にカタストロフィックな展開を期待しているかのような発言をしているからである。1997年のインタビュー(宮崎, 2002 に所収)では、スタジオジブリで防災訓練を頻繁にすることの背景には、関東大震災を待ち望む気持ちがあることを素直に認め、同じく1997年の養老孟司との対談では「富士山が噴火する姿って見てみたいじゃないですか」「富士山くらい噴火してくれなきゃって思いませんか?」(宮崎・養老, 2008 に所収)と述べている。

不謹慎な発言であることは百も承知の上で、こういう「死の本能」(Freud, 1920)

とも言える自身の内的な衝動を素直に口にするとところが宮崎駿の人間味あふれるところであろう。「となりのトトロ」に話を戻すと、「原爆」という発言は、理想的なユートピアをひたすら描き続けることにどこか胡散臭さを感じていた宮崎が、母なる大地を一瞬にして破壊してしまいたい衝動にかられていたとも考えられる。そしてサツキの心理に焦点を合わせるならば、無意識の中にあった母親を万能的に消し去りたい衝動が、夢の歪曲を経て、巧みに偽装された形となって現れたとも考えられる。

4. 無意識的に描かれたもの

先に紹介したように、宮崎は半ば意図的に「となりのトトロ」においては人間のよい面のみを描いたことを述べている。しかし、これまで考察してきたように「となりのトトロ」にも、他の宮崎作品に比べたらソフトな表現ではあるが、人間の否定的な側面（隠蔽しようとした側面）が少なからず描かれていることが、浮かびあがってきた。このことは、意識的に人間の良い面を描こうとしても、無意識的にそこからあふれてくるものがあり、それが作品の中にちりばめられることになったと考えられる。

人間を描くということは、そうならざるを得ない面があると思われる。愚かで凶暴な面を否認して、人間の良い面だけを見ようとしてもそれは不可能なのである。矛盾する両面をもっていることが人間の本質である故に、どうしてもその両面を垣間見せてしまうのが人間なのである。その人間の本質が「となりのトトロ」の登場人物の中に観察でき、さらにはそれを無意識のうちには作品の中に描き込んだ宮崎の中にも観察することができた。

Ⅳ. 今後の課題

以上、「となりのトトロ」を細かく見て

いくことで二つの仮説を検証し、「となりのトトロ」には様々な防衛機制が描かれていること、言い間違いや夢を通して、無意識的な衝動を垣間見ることができることが考察できたと言えよう。そしてさらに監督の宮崎駿自身の言葉もその根拠となることを示した。

しかし、「となりのトトロ」にはそれだけでは論じきれない大きなテーマが流れている。それは、子どもはいかに自立していくのか、ころろはいかに成長していくのか、その際のトトロの役割は何なのか、というテーマである。そのことを掘り下げていくことで、今回は触れることができなかった目的の一つ、「となりのトトロ」は何故多くの人々を惹きつけてやまないのだろうかという問いにも迫れると思われる。今後、このことについても考察を深めていきたい。

文 献

- 青木研二 (2011a) 『となりのトトロ』—その幻想性の構造 (Ⅰ). 茨城大学人文学部紀要, 人文コミュニケーション学科論集, 10, 1-15.
- 青木研二 (2011b) 『となりのトトロ』—その幻想性の構造 (Ⅱ). 茨城大学人文学部紀要, 人文コミュニケーション学科論集, 11, 47-64.
- Freud, A. (1936) Das Ich und die Abwehrmechanismen, Internationaler Psychoanalytischer Verlag, Wien. 黒丸正四郎・中野良平訳 (1982) 自我と防衛機制. アンナ・フロイト著作集 2. 岩崎学術出版社.
- Freud, S. (1900) The Interpretation of Dreams.S.E.4-5. 高橋義孝訳 (1969) 夢判断 (上・下). 新潮社.
- Freud, S. (1901) The Psychopathology of Every Life.S.E.6. 池見西次郎・高橋

- 義孝訳 (1970) 日常生活の精神病理学。フロイト著作集 4, p.5-236. 人文書院。
- Freud, S. (1910) A special Type of Choice Object made by Men. (Contributions to the Psychology of Love, I) S.E.11. 高橋義孝訳 (1983) 「愛情生活の心理学」への諸寄与, 1. 男性に見られる愛人選択の特殊なタイプについて。フロイト著作集 10, p.176-200. 人文書院。
- Freud, S. (1916) Some Character-Types Met with in Psycho-Analytic Work. S.E.14. 佐々木雄二訳 (1970) 精神分析的研究からみた二, 三の性格類型。フロイト著作集 6, p.114-136. 人文書院。
- Freud, S. (1916-1917) Introductory Lecture on Psycho-Analysis. S.E.15,16. 高橋義孝・下坂幸三訳 (1977) 精神分析入門 (上・下)。新潮社。
- Freud, S. (1920) Beyond the Pleasure Principle. S.E.18. 小此木啓吾訳 (1970) 快感原則の彼岸。フロイト著作集 6, p.150-194. 人文書院。
- Freud, S. (1933) New Introductory Lecture on Psycho-Analysis. S. E. 22. 高橋義孝・下坂幸三訳 (1977) 精神分析入門 (続)。精神分析入門 (下)。新潮社。
- Freud, S. (1940) Splitting of the Ego in the Process of Defence. S. E. 23. 小此木啓吾訳 (1983) 防衛過程における自我の分裂。フロイト著作集 9, p.152 - 155.
- 細江光 (2006) 名作鑑賞「となりのトトロ」- 母なる自然とイノセンス -。甲南女子大学研究紀要42号, p.85-149.
- 伊崎純子 (2006) イマジナリー・コンパニオンとしての「となりのトトロ」。白鷗女子短大論集 30 (1), p.43-53.
- Klein, M. (1935) A contribution to the psychogenesis of manic-depressive states. The Writings of Melanie Klein, Volume I. London. Hogarth Press. 安岡誉訳 (1983) 躁うつ状態の心因論に関する寄与。メラニー・クライン著作集 3, p.21-54. 誠信書房。
- Klein, M. (1946) Notes on some schizoid mechanisms. The Writings of Melanie Klein, Volume III. London. Hogarth Press. 狩野力八郎・渡辺明子・相田信男訳 (1985) 分裂的機制についての覚書。メラニー・クライン著作集 4, p.3-32. 誠信書房。
- 久美薫 (2008) 宮崎駿の時代 1941 ~ 2008. 鳥影社。
- 宮崎駿 (1996) 出発点 1979 ~ 1996. 徳間書店。
- 宮崎駿 (2002) 風の帰る場所 ナウシカから千尋までの軌跡。ロッキング・オン。
- 宮崎駿・養老孟司 (2008) 虫眼とアニ眼。新潮社。
- Rogers, C. R. (1963) Toward a Science of the Person, paper prepared for a symposium on "Behaviorism and Phenomenology: Contrasting Bases for Modern Psychology". At Rice University., Houston Texas. 村山正治訳 (1982) 人間の科学をめざして。行動主義と現象学。P.161-204. 岩崎学術出版社。
- 立木康介 (2012) 序説。立木康介編著 精神分析の名著。P.3-68. 中央公論新社。
- Winnicott, D. W. (1960) Ego distortion in terms of true and false self. The Maturation Process and the Facilitating Environment. Hogarth, London. 牛島定信訳 (1977) 本当の, および偽りの自己という観点からみた, 自我の歪曲。情緒発達の精神分析理論, p.170-187. 岩崎学術出版社。